

表紙 紙本著色泰西風俗図
解説は22ページ参照
題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

博物館随想……………松下隆章……4

日本美術の海外展と文化財の保存…………西川杏太郎……7

ICCROMの研修に参加して……………天田起雄……11

文化庁ニュース

文化庁の昭和54年度

概算要求まとまる……………14

第12回現代美術選抜展……………17

法隆寺防災工事着工……………17

昭和53年度重要文化財建造物修理

主任技術者講習会(普通コース後期)

終わる……………18

昭和53年度文化財修理技術者

講習会終わる……………18

好評の第2回日本民謡まつり……………18

マナブ間部展……………20

民俗歳時記シリーズ 11月

霜月祭り……………榎本由喜雄……21

我が県の文化行政

先駆的な岩手芸術祭……………菅原一郎……23

文化財保護法教室(22)

伝統的建造物群保存地区の保護(II)……………27

美術館・博物館・文化施設めぐり⑬

現代感覚あふれる

栃木県立美術館……………30

国立劇場ニュース……………31

日本美術の海外展と文化財の保存



西川 杏太郎

(文化庁文化財保護部美術工芸課課長)



国宝や重要文化財などを含む日本の古美術品を外国の博物館で公開するいわゆる「海外展」の歴史は古い。昭和二十六年秋、日米講和条約の締結を記念してサンフランシスコのデ・ヤング美術館で行われた大規模な「日本古美術展」はそのしりである。それ以来今日まで、文化庁が主催して行ったものだけでもすでに十四回、これに国立博物館や民間の美術館、国際交流基金あるいは新聞社などが主催したものと加えると、実に六十二回もの海外展が行われている。つまり、二十数年の間、毎年二つか三つの海外展が行われていることがわかる。行き先はおもに西ヨーロッパと北アメリカであるが、ソ連や

東ドイツでも行われているし、東アジアでは昭和四十八年、北京と上海の博物館で「北斎展」が行われていて、開催地は合計十五か国・四十八都市に及んでいる。

今年、文化庁が送る海外展は西ドイツの要望による「日本陶磁名品展」である。これは日本陶磁の歴史をたどり、それが現代の陶磁作品にどのように生かされているかを示す、一九〇点の作品(うち重要文化財など一四点)によって構成されるもので、デュッセルドルフ、シュトゥットガルト、西ベルリンの三都市を巡回する予定である。すでに文化庁の南主任調査官と広井調査官の二名が随伴して、九月下旬、全作品は

無事現地に到着、十月一日からデュッセルドルフ市立ヘッチェンス美術館で開催され、好評を博している。

もちろん、日本の美術品を外国へ送るだけでなく、諸外国からも、大小の美術展が日本に迎えられ、博物館や美術館、あるいはデパートなどでひんばんに開催されていることは御承知のとおりであり、大都会に住む人にとっては、いささか食傷ぎみであるという、せいたくな声すら聞くほどの盛況を呈している。

こうした美術展が、政治の駆け引きとは別の場で、国際的な相互理解と親善に大きな役割を果たしていることは、ここに改めて強調するまでもないが、世界一速い長距離電車(新幹線)を毎時四回以上定時運転している国、世界一流のカメラやオーディオ機器など、精密機械を大量生産している経済大国日本が、決してそれだけの国ではなく、長い歴史と伝統にはぐくまれたすばらしい文化を背景に備えた国であること、を外国の人たちに知らせる、無言の外交官として果たした功績には計り知れないものがあるであらう。

事実、日本古美術の海外展はどこでも大変盛会で、会期中、展覧会とは別に、開催地で日本関係のいろいろな催し物が企画され、連日新聞

の文化欄をにぎわし、時には開催都市の人口の二割以上の入場者を集めたこともあって、毎度、その反響の大きさに我々自身が驚かされているほどである。

◇
老僧に折檻されお寺の柱にくくりつけられた少年雪舟の、涙で描いたねずみが走り出したとか、応挙の画から夜な夜な幽霊が抜け出したとかいった荒唐無稽なお話が、彼の国の専門家によって、展覧会場内で大まじめに論じられたこともあるという海外展初期の出来事は論外であるが、その後海外の日本美術研究者の質も急激に高くなり、人材も増えてきた。そして、今では国際的な日本古美術のシンポジウムもひんぱんに行われるようになり、日本から学者が招待され、また日本に海外の日本古美術研究者を招聘することも恒例化しつつある。最近では、昨年の暮れ、奈良国立博物館の倉田館長と筆者とが、西ドイツのケルン東亜美術館で行われた「仏教美術」のシンポジウムに招かれ、今春、奈良国立博物館で行われた「仏教美術の源流」展のシンポジウムに数名の欧米研究者を招き、また現在西ドイツで行われている「日本陶磁名品展」の記念シンポジウムに東京国立博物館の林屋工



会場風景 (チューリッヒ市立美術館)

芸課長が招待されたという例もあるなど、海外展はこうした学術交流の促進にも役だっている。また展覧会の内容そのものに対する要望も変わりつつあり、日本古美術の総花的な展示から、埴輪展、禪林美術展、文人画展、あるいは北斎展といった、特定ジャンルの作品や、個人作家の作品を中心とする、より細かく高度な内容の展示が求められるようになってきている。

干割れを起こす危険がある。木の枠に和紙を貼って造った屏風や襖絵などは、大きく裂けてしまふこともあり、絵の彩色顔料が剥落する心配もある。

こうした危険については、海外展の初期から十分に注意され、東京国立文化財研究所の科学者たちによってその対策が研究されており、気温は摂氏二〇度以内、相対湿度は六〇パーセント内外という値が、日本の古美術品保存に必要な標準値とされてきた。この湿度は欧米の博物館内の空調の標準値五〇パーセントより一〇パーセント高い値である。

従って海外展を行う際には、事前に先方の主催館と文化庁の担当課との間で、十分な検討が行われ、開催館の図面を取り寄せ、その設備と機能が確認され、日本側の要望する環境条件について十分な了解を取りつけることが行われる。日本側では、まず出品予定品を各地の所有者から拝借し、すべてを東京国立博物館内の一室に集め、燻蒸による殺菌・殺虫を行い、できるだけ長い時間をかけて湿度の調整と慣らしが行われるのである。

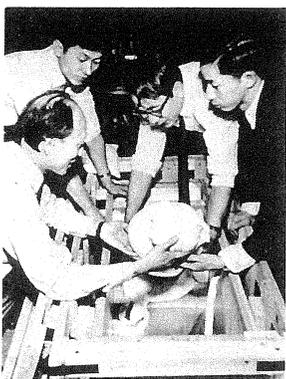
梱包に当たっては、美術品に触れる部分には必ず上質のうす葉紙で十分に養生し、クツシヨンにもめめん綿が用いられる。彫刻の場合は、

その上をさらに幅広のさらし木綿で包帯する。こうして丁重な内包みを終えると、内面にアルミ箔を貼ってエアータイトにした木箱内に納められ、ここには、あらかじめ相対湿度六〇パーセントに調整された調湿剤(ゼオライトベレット)と、少量の防霉剤が入れられる。これをさらに外箱に納めるが、ここにも同じ薬剤を加え、最後にガムテープで密封する。つまり六〇パーセントという湿度を目的地まで保持する処置が施されるわけである。輸送の航空機内では、できるだけ通常の室温に近い荷物室が選ばれ、時には客席の一部に積みこまれることもある。

◇
こうして美術品が発送されると、あとはすべて、展覧会の重要な裏方である日本側の随伴者の手にゆだねられることになる。随伴者は、美術の専門家であること、日本美術の取り扱いや陳列に熟練していること、よい保存環境を保つため、温湿度・照明などの内容について必要最小限の科学的知識を持っていることなどを条件として、文化庁の担当課技官や博物館学芸員の中から選ばれる。特に外地での荷解き・梱包のすべては、随伴者自身が行わなければならないので、美術品の完璧な梱包技術を持っているこ

◇
ところで、日本古美術の海外展とその反響や成果については、筆者自身も新聞や雑誌に執筆したことがあり、諸先輩による報告なども公にされているので、その華やかな一面はすでにご存じの方も多いと思うが、展覧会開催に当たっての裏方の苦労は実は並たいていではないのである。それは、各地の所有者からお預かりした日本の古美術品を、環境の違う外国に出品しても、絶対に傷めることがあってはならないという、保存には万全を期さなければならぬという、文化財保護の大鉄則が前提となるからである。夏は気温が高く、また同時に湿度も異常に高くなり、冬は低温であるとともに湿度が低くなり、年間を通じては他の国に比べて高温なのが日本の気候の特色である。日本の古美術品は、そうした環境の中で制作され、長く保存されてきているのである。これに比べて欧米、特にアメリカは四季を通じて湿度が低めであり、夏は気温の上昇と反比例して湿度が下がり、冬は低温ではあるが湿度が高いというのが特色で、日本の気象条件とは全く異なる。従って、日本の木彫像や漆工芸品類をいきなり外国の博物館で陳列すると、湿度が低いため急激に乾燥されて

とも随伴者に必須の条件となる。
日本の古美術品梱包の技術は世界一と自負してよい。近ごろは、陶磁器など小型の作品は、あらかじめ型抜きしたクツシヨンで荷造りするので手間もはぶけ、楽になったが、複雑な形で重量のある彫刻などは、相変わらず、うす葉で包み、めめん綿のふとんで覆い、全身をさらし巻きとしている。どの展覧会でも、我々の手さばきと、包み上げた形の美しさには、外人たちが目をまるくして驚く。梱包それ自身が芸術である」と新聞にほめたえられ、また、現地の人たちから、「お前たちは美術史家なのか、科学者なのか、荷造り技術者なのか、一体どれが本職なんだ。それとも日本の大学では荷造りを教えるのか」と真顔できかれ、返答に困った経験もある。



彫刻の梱包作業

さて、目的地の博物館に到着し、梱包ケースを館内へ搬入すると、まず展示室と荷解き場の温湿度を通風乾湿計で計測し、希望の温湿度にするよう館側に要請する。ケースはできるだけ長く新しい環境に慣らしてから、まずふたをあけ、ここでまた一日おいて内箱を取り出し、と

ゆっくり日数をかけながら梱包を解いて陳列する。展覧会が始まると、毎日展示品の状況を検査し、同時に温湿度の状態を確かめる。必要があれば臨時の加湿器を持ちこんで運転させる。

昔は展示室のすみにビニールシートを敷き、苔や草花をきれいに並べ、そこへ水をまいて湿度を上げた例もあるらしい。彩色が美しく材質の弱い絵画や脆弱な染織品などは、日本国内での展覧会と同様、陳列替えを行う。これも随伴者の役目である。

どの博物館でも、木と紙とうすい絹など、弱い材質でできた日本の古美術品を、神経質なほど丁寧に扱う私たちの態度を尊重し、できるだけ協力してくれるが、それでも随伴者の仕事はなかなか厄介であり気が疲れる。私などはスイス滞在の三か月間に体調をくずし、ついに医者への厄介になったが、帰国後きいてみて、海外展に随伴した先輩たちの中で、やはり展覧会の気疲れと過労から、病院の世話になった人が

何人もいたことを初めて知った。

今年送り出した西ドイツの展覧会は陶磁器だけなので温湿度調整の必要はない。しかし、いったんひびが入れば絶対に元にもどせない、いわゆる「こわれ物」ばかりなので気の疲れることは同じであろう。



昭和四十九年に、東京で開かれたカルコン(OILCON 日米文化教育会議)の博物館交流部会の席上、日米間で今後美術展の交換を行う際、お互いの国情と美術品の特性・保存環境のちがいなどを、専門家だけで十分討議し、交換展の際の美術品保存に関する基本的なガイドラインを作ろうという動議が米国側から出された。これに応じて日米の博物館専門家・保存科学者による小会議が、ワシントンと東京で二回にわたって行われた。討議の内容は、日本美術と西洋美術の材質技法上の相違、それらの保存のための適切な温湿度の標準値、照明による美術品の損傷とその防止法、梱包の方法、殺虫殺菌の実情など、細部にわたる非常に詳しいものであった。この会議で、日本の美術品保存の基本的な考え方は非常に高く評価され、そのほとんどすべてがレポートの中にもり込まれた。このレポ

ートは今春のカルコン第九回総会で採択され、近く印刷し公刊されることになった。これは、そのまま今後のヨーロッパや他の国との交換展の指針としても、将来不可欠のものとなるであろう。

現在、海外との美術交換展はますますさかんになろうとし、中小美術館どうしの交換展などの企画も要望されつつある状況である。この種の展覧会が他国民に与える教育的効果から考えても、これは好ましい現象といえるが、その場合、まず出品作品の選択を慎重に行い、その上で相手方美術館の施設を事前に十分検討し、随伴する日本側専門家の質も、絶対に低下することのないよう、より以上に肌理細かく、これに対処していかなければならないであろう。出品される美術品が重要文化財指定物件であるか否かを問わず、いざさかも損傷させることのないよう保護することが第一義だからである。



編集後記

十一月の第一週が文化財保護強調週間と定められており、この期間全国各地で国民の文化財に対する理解を深める行事が催されることとなっている。もとより、強調週間であり、文化遺産の価値を知り、守っていくようにする意識は、日々の生活の中で培われていくものでなければならず、この点で博物館・美術館の役割を、改めて見直す必要がある。

今月号には、前京都国立博物館長松下隆章氏に、今日の博物館の機能や姿勢について書いていただいた。近年、各地の博物館・美術館の数も増え、その事業内容も常設展・特別展を問わず工夫されたものが多くなってきているようであるが、その中身をさらに密度の高い、豊かなものにしていくには、展示する側の創意工夫と観覧する側の積極的姿勢との双方が求められる。

(史)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)2681-2401(代表)

「文化庁月報」十一月号

(通巻第一二二号)
昭和53年11月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03)2681-2401(代表)

振替口座 東京 911-611番

印刷所 物行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円